

教材開発例 1 「恐羅漢」



〔中学校 主題：自然に対する畏敬の念 内容項目：3の(2)〕

恐羅漢山は、山県郡安芸太田町と島根県益田市との境にそびえ、県内最高峰（標高1346m）を誇る山である。その一帯は、西中国山地国定公園に指定され、1年を通して雄大な自然を感じることができるエリアとして知られ、多くの観光客でにぎわう。また、恐羅漢を覆うブナの木々の落ち葉は、その中に水分や栄養分をたっぷりと蓄え、流れ出る川や海の多くの生き物の命の源となっている。



(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

山県郡安芸太田町は西中国山地に位置し、県下最高峰の恐羅漢をはじめとする山々に囲まれ、日本を代表する渓谷の一つである三段峡など、西中国山地国定公園に代表される雄大な自然に恵まれた地域である。地域には、稲作が不利な環境の中にあってもあきらめずに用水路をつくりあげていった歴史や、現在の過疎化に悩む地域を盛り上げようとする活動（祭りなど）、伝統工芸や神楽・田楽などの伝統文化など、道徳の時間の資料になり得る多くの素材がある。

これらの中から恐羅漢を選定した。それは、恐羅漢という素材が、地域の特色や指導者自身が生徒に伝えたい道徳的価値を含むものであると考えたからである。今回は、その恐羅漢で、平成20年2月に起こったスノーボーダー遭難事故を取り上げ、恐羅漢の自然の雄大さ（敬）と、事故当時に見せた自然の厳しさ（畏）を考えさせることで、「自然への畏敬の念」について迫っていくことができると考えた。

(2) 情報の収集



探してみよう

○ 情報通信ネットワーク（新聞記事）

最初に取り組んだのは、事故当時の新聞記事を検索することである。インターネットを利用して、当時の新聞記事を検索し、いつ、どこで、どんな事故が起こったのかといった基本情報を収集した。

○ 地域の関係者（インタビュー）

次に、当時捜索活動に中心的に関わった町消防団員の方など、当時の事故の関係者へのインタビューを行い、事故経緯や事故当日の恐羅漢の様子を細かく聞いた。特に、資料には、捜索中の思いを取り入れていきたいと考え、捜索中に感じたことを丁寧に聞き取った。

○ 郷土資料（町史）

これまでの情報の収集から、恐羅漢と地域の人々の生活とのつながりがポイントと考えた。そこで、町史を閲覧し、恐羅漢を地域の人々がどのように感じてきていたのかを調べた。

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

① 主題やねらいを決定する



中学校解説では、内容項目3の(2)について、「人は、自然の美しさに触れ、自然と親しむことにより自らの人生を豊かにしてきた面が強い。自然を愛護するということは、人間が自然の主となって保護し愛するということではなく、自然の生命を感じ取り、自然との心のつながりを見いだして共に生きようとする自然への対し方である。」とある。また、「心のノート」の関係ページには、キーワードとして、「悠久の時の流れ この大自然」、「大自然に何を想う」と示されている。

これらを確認し、「恐羅漢」を素材として資料を作成していくに当たっては、恐羅漢における遭難事故の話を通して、生徒たちが普段感じている恐羅漢の自然と対比させながら、自然に対する畏敬の念を深めることが大切であると考えた。

② 対象となる学年の発達の段階や特性を把握する

今回、対象とした中学校第三学年の生徒は、恐羅漢でスキー実習の体験活動を行っている。その体験活動を通して、おだやかな冬の恐羅漢のよさは体感しているが、他の季節における恐羅漢のよさや冬の厳しさについては実感として理解していない。こうした実態を踏まえて、自然への畏敬の念を深める資料となるよう留意した。

③ 登場人物や状況の設定する

〔具体的な場面設定と登場人物〕

○場面設定 恐羅漢でのスキー実習の準備をしている主人公が、父から恐羅漢での遭難事故の話聞く。

○主人公 ひろし

- ・ 恐羅漢が大好きな中学生

○補助的な人物 ひろしの父

- ・ 恐羅漢での遭難事故で地元消防団員の一人として捜索活動に参加した。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

| | 起 | 承 | 転 | 結 |
|----------|--|---------------------------------------|---|--|
| 場面のイメージ絵 | | | | |
| 絵の説明 | 翌日のスキー教室を楽しみに準備をしている主人公ひろしに、父が話しかけてくる。 | スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。(遭難から第一日目の捜索終了) | スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。(第二日目の捜索から発見させるまで。) | 父の話聞いた後、再びスキー教室の準備をしながら、恐羅漢の自然を考えるひろし。 |

4コマ場面絵

⑤ 場面分けをもとに文章化する

⑥ 不要な文章や文言を削除する



推敲の流れ

初稿

→
道徳的価値に迫る
中心場面を設定する
ための改善

第二稿

→
ねらいとする道徳
的価値を明確にする
ための改善

第三稿

→
考えさせたい部分
を削除するなど、道
徳的価値に迫るた
めの改善

最終稿

初稿

大好きな恐羅漢

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来てから、夕飯も食わずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ瀬戸内海や日本海まで見渡すことができる山である。ひろしは、その恐羅漢でのスキーが大好きだった。恐羅漢の雪はパウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質だし、頂上付近から滑り下りるときの眺めは最高で、ひろしはこの眺めがお気に入りだからだ。夕飯も食わずに準備をしているひろしを心配して父がやってきた。

「何も食わずに手入れをするなんて、ひろしはそんなにスキーが好きなのか？」

「うん、とても好きだよ。中でも恐羅漢でのスキーは最高だよ。眺めはいいし、雪質だって抜群だからね。毎日でも行きたいくらいだよ。」

と、ひろしは得意気に恐羅漢のすばらしさを話した。すると、父は静かにひろしの横に座り、数年前に恐羅漢で起こった遭難事故の話をし始めたのだ。

平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、グレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれての捜索だったのだが、昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、その雪が捜索隊の行く手をふさいでいたのだ。さらには、恐羅漢の自慢でもあるパウダースノーの新雪のため、かんじきを掃いても腰付近まで体がうまり、前進するには這いながら蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は約1メートル程度しかなく、恐羅漢に慣れた人でさえも方角を見失うほどだった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。そして、やっと二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

ひろしは父の話聞きながら、普段とは違う恐羅漢の姿に驚いていた。

「本当にそんなことがあったの、お父さん。」

「ああ、本当の話なんだよ。」

ひろしは言葉を失った。そして、

「それで、行方不明になった7人はどうなったの？」と尋ねた。

父は再び捜索活動の話をつつくりと始めた。

午前中の捜索活動を終え、頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いていた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してく



る人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。そのことを知った消防団員2名は本部に戻り、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道には、15センチメートル程度の雪が積もっていた。降った雪の多くは林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。搜索を始めて一時間たったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「ハイ…」

「他は生きとるんか？」

「ハイ…」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。すぐさま後ろから自衛隊員が駆け出て、残りの5名も無事発見された。

遭難した7名は、最初の日の夕方には、廃校になった小学校を見つけ避難していた。翌日の2月3日は吹雪になっていたので、廃校跡で一日を過ごしていた。上空ではヘリコプターの音がしていたので、校舎の板壁や畳をはがし、偶然持っていたガスプレーを使って火をつけて合図を送り、暖をとっていたらしい。おかげで7名は凍えることなく、全員無事に見つかったのだった。

話を終えた父は、数枚の写真をひろしに見せてくれた。それは、搜索活動中の写真だった。

「なあ、ひろしはさっき、恐羅漢が大好きだって言ってただろう。だからこそひろしには、恐羅漢のもう一つの顔も知っていて欲しいと思ったからこの話をしたんだ。」

そう言って父は、もう1枚の写真をひろしに手渡した。

さっきまでは不安げな表情だったひろしは、涙をぬぐって、にこりと笑い、

「うん、わかったよ、お父さん」

と言って、ふたたびスキーの準備を始めた。父から手渡された恐羅漢から見た山々の写真を横に、ひろしの心の中では、恐羅漢に対する思いが何か変わったようだった。

第2稿

道徳的価値に迫る中心場面を設定するための改善

| 第2稿 | 改善点及びその理由 |
|---|--|
| <p style="text-align: center;">恐 羅 漢 ア</p> <p>明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来てから、夕飯も食わずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ瀬戸内海や日本海まで見渡すことができる山である。ひろしは、その恐羅漢でのスキーが大好きだった。恐羅漢の雪はパウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近から滑り下りるときの眺めも最高で、ひろしはこの眺めがお気に入りだった。夕飯も食わずに準備をしているひろしを心配して父がやってきた。「何も食わずに手入れをするなんて、ひろしはそんなにスキーが好きなのか？」</p> <p>「うん、とても好きだよ。中でも恐羅漢でのスキーは最高だよ。眺めはいいし、雪質だって抜群だからね。毎日でも行きたいくらいだよ。」</p> <p>と、ひろしは得意気に恐羅漢のすばらしさを話した。すると父は、「ひろしは、数年前に恐羅漢で起こった遭難事故のことを覚えているか？」と尋ねた。</p> <p>「うん、たしか、お父さんも消防団員として搜索活動に参加していた事故だよね。」 イ</p> <p>父はうなずいて、その遭難事故の話をし始めた。</p> | <p>ア</p> <p>構成チェック票(例)項目② 「子どもの心に訴えるものか」</p> <p>自然への畏敬の念を考えたとき、「敬」の捉えを「大好き」という程度のもではいけないと考え、恐羅漢に対する多様な考えを引き出すために、題を「大好きな恐羅漢」から「恐羅漢」に変更した。</p> <p>イ</p> <p>構成チェック票(例)項目④ 「登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか」</p> <p>父が搜索活動に参加しているという設定にすることで、遭難事故を主人公にとってより身近なところで起こった事故であるという設定とした。</p> |



平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに搜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晚中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な搜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体が^(注2)かんじきを掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晩からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。搜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。ウ 行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、搜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて搜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

エ

削除した部分

午前中の搜索活動を終え、搜索隊がもどった現地搜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。オ

オ

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。そのことを知った消防団員2名は本部に戻り、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルようになっており、15センチ程度の雪が地面に積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは別世界のものだった。カ

カ

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「ハイ…」

「他は生きてるんか？」

「ハイ…」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。すぐさま後ろから自衛隊員が駆け出て、残りの5名も無事発見された。

キ

削除した部分

ウ

構成チェック票（例）項目②
「子どもの心に訴えるものであるか」

搜索活動について、羅列的に表現され、畏怖の部分が伝わりにくいことから文章構成を変更した
また、生徒たちが感じている恐羅漢とは違う光景がここにあることを強調するために、「もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった」という表現を加えた。

エ

構成チェック票（例）項目④
「登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか」

搜索活動の様子と父子の会話が混ざっているなど、思考を分断してしまうおそれがある部分は削除した。

オ

構成チェック票（例）項目②
「子どもの心に訴えるものであるか」

吹雪の中での搜索の深刻さをとらえさせるため、午前中の搜索を終えて帰ってきた搜索隊の失望感を描いた。

カ

構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

昨日と今日とで、全く違う自然の神秘性を感じさせるための表現を加えた。

キ

構成チェック票（例）項目④
「登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか」

救出された事実だけをおさえるため、遭難者の3日間を再度描いた表現を削除した。



ク

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

父から手渡された捜索中の写真と恐羅漢頂上からみたパノラマ写真だけでねらいに迫るには無理があると考え、恐羅漢の自然について考えるきっかけとなるよう、「大きいんだよ、恐羅漢が…」を加えた。また、恐羅漢の頂上からの景色を見下ろした時のひろしの心情を考えることができるよう、スキー教室当日に、ひろしが恐羅漢頂上に立っている場面を設定した。

話を終えた父は、夕飯を早く食べるように伝えてあと、ひろしに向かって「大きいんだよ、恐羅漢は……。」
と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢は絶好のスキー日和だった。
ひろしは、恐羅漢の頂上に立って、しばらくあたりの景色を見つめていた。
「おい、ひろし行くぞ。」
友だちの声が聞こえてきた。
「ああ」
と返事をして、ひろしは恐羅漢の山を滑り降りていった。 ク

第3稿

ねらいとする道徳的価値を明確にするための改善

第3稿

改善点及び理由

恐 羅 漢

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来てから、夕飯も食わずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢から流れ出た水は、太田川の豊かな川の流れをつくり、私たちの生活を支えてくれている。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。恐羅漢の雪は^(注1)パウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。それに、ひろしの祖父は恐羅漢スキー場の近くに住んでいて、幼い頃にはよく遊びに行っていた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリやナルコユリなどの花も見られ、登山に訪れた人の心を和ませてくれる。ひろしは、山菜を採りに出かけることも多くあり、その時には決まって祖父はひろしに、

「恐羅漢のおかげでわたらの生活は豊かになっとるんじゃけえの。」
と言っは、恐羅漢の話をたくさんしてくれた。その祖父の影響もあつてか、ひろしの恐羅漢への思いは強かった。 ケ 夕飯も食わずに準備をしているひろしを心配して父がやってきた。

「母さんにおにぎりをつくってもらったから、これでも食べながら準備をしたらどうだ。」

「あつ、ありがとう。」

と言っは、ひろしはおにぎりを一口にほおばった。

「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室だからね。」

と言っは外の様子を見た。すると父は、

「ひろしは、数年前に恐羅漢で起こった遭難事故のことを覚えているか？」

と尋ねた。

「うん、たしか、お父さんも消防団員として捜索活動に参加していた事故だよな。」
父はうなずいて、その遭難事故の話をし始めた。

平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。

ケ

構成チェック票（例）項目②
「子どもの心に訴えるものであるか」

「畏敬の念」の「敬」を感じさせる部分が、スキーシーズンの恐羅漢の自然のみの記述であった。そこで、生徒が気づいていない「敬」を感じさせるため、スキーを通して感じている「敬」の記述を減らし、恐羅漢の冬以外の自然を描くとともに、恐羅漢の近くに暮らす祖父を登場させ、恐羅漢と生活とのつながりを加えた。



スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な搜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体が^(注4)かんじきを掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晩からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。搜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、搜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて搜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の搜索活動を終え、搜索隊がもどった現地搜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。 **コ** 早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっており、15センチ程度の雪が地面に積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「ハイ…」

「他は生きてるんか？」

「ハイ…」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。すぐさま後ろから自衛隊員が駆け出て、残りの5名も無事発見された。

話を終えた父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「かなわないよ、恐羅漢には……。」 **サ**

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢は絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立って、しばらくあたりの景色を見つめながら、幼い頃に聞いた祖父の話や昨夜の父の話を思い出していた。

コ

構成チェック票（例）項目⑥
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

匹見町の人々がとっていた行動が、恐羅漢という自然とともに生きてきた人々の知恵であることを知らせるための表現を加えた。

サ

構成チェック票（例）項目⑥
「叙述によく具象性を与えているか」

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」を「かなわないよ、恐羅漢には……。」に変更し、よりねらいとする道徳的価値に迫りやすくした。



私たちを守り生活を豊かにしてくれる恐羅漢
時には人の命をも飲み込んでしまう程に荒れ狂う恐羅漢

どちらが本当の恐羅漢なんだろう。

シ

「おい、ひろし行くぞ。」
友だちの声が聞こえてきた。
「ああ」

と返事をして、ひろしは恐羅漢の山を滑り降りていった。

シ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

気づかせたい道徳的価値を明確にするため、具体的に恐羅漢の頂上でひろしが何を考えているかが分かる文章を加えた。

最終稿

考えさせたい部分を削除するなど道徳的価値に迫るための改善

| 最終稿 | 改善点及び理由 |
|---|--|
| <p style="text-align: center;">恐 羅 漢</p> <p>明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来てから、夕飯も食わずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪はパウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。</p> <p>ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリやナルコユリなどの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした遊び場であり、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。</p> <p>ある日、ひろしがいつものようにその場所で遊んでいると、祖父がやって来た。「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」 「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」 ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。 「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさんの水を蓄えることができる。そして、その水は少しずつ柴木川に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかの」 「母なる山、恐羅漢？」 ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。</p> <p style="text-align: right;">ス</p> <p>「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」 と言って、外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしはその雪を見て、「このぐらいの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよな。」 と言うと父は、降り続ける窓の外を雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をはじめた。</p> <p style="text-align: right;">セ</p> <p>平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けて</p> | <p style="text-align: center;">改 善 点 及 び 理 由</p> <p style="text-align: center;">ス</p> <p>構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」</p> <p>恐羅漢のブナ林が多く水を蓄え、太田川の豊かな川の流れを生み出しているという自然の豊かさや悠久の自然を感じさせる表現や「母なる山、恐羅漢」という言葉を入れ、畏敬の念の「敬」がより明確になるよう主人公と祖父との対話を整理した。</p> <p style="text-align: center;">セ</p> <p>構成チェック票（例）項目④ 「登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか」</p> <p>父が遭難事故の話始める必然性をもたせるために、このぐらいの雪なら大丈夫と思っている主人公を戒める意味で父が遭難事故の話をはじめるという設定に変更した。</p> |



いた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な搜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチにも達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体がかんじきを掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨夜からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。搜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、搜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて搜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の搜索活動を終え、搜索隊がもどった現地搜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。

「こんな恐羅漢は初めてだ。」

すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。

「いいやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじっとな…。」 ソ

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないとも考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後九時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には一五センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。 タ「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの5名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。 チ父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」 ツ

と言い残して居間に戻っていった。

ソ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

若年の消防団員の「こんな恐羅漢は初めてだ。」、年配の消防団員が「いいやそれは違う。…」という語りなど恐羅漢という自然の人間の力を超えた驚異を語る表現を加えた。

タ

構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

不要な会話を削除し、発見時のやりとりを整理した。

チ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

話を聞き終えた主人公の気持ちを、身震いをするこやほっとしたという言葉で表した。

ツ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

第3稿で変更した「かなわないよ、恐羅漢には……。」という表現では、生徒の思考が広がらないと考え直し、「大きいんだよ、恐羅漢は……。」という表現に戻した。



翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。

「おい、ひろし行くぞ。」
友だちの声が聞こえてきた。
「ああ」
と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

テ

テ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

ねらいとする道徳的価値が表現としてははっきりと表れ過ぎているため、2つの恐羅漢の表現を削除し、「恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えた。」という表現に変更した。

恐 羅 漢

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来てから、夕飯も食べずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気の良いれば日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪はパウダースノー⁽¹⁾とって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。

ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリ⁽²⁾やナルコユリ⁽³⁾などの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした遊び場であり、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。

ある日、ひろしがいつものようにその場所で遊んでいると、祖父がやって来た。
「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」
「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」
ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。

「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさんの水を蓄えることができる。そして、その水は少しづつ柴木川^{しばき}に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかの」
「母なる山、恐羅漢？」
ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。

「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」
と言って外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしはその雪を見て、
「このぐらいの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよな。」
と言うと父は、降り続ける窓の外雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をはじめた。

平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチにも達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体がかんじき⁽⁴⁾を掃いても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。捜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一歩間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて捜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の捜索活動を終え、捜索隊がもどった現地捜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。



「こんな恐羅漢は初めてだ。」

すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。

「いやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじっとな…。」

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかとも考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には15センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかつた。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの5名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。

「おい、ひろし行くぞ。」

友だちの声が聞こえてきた。

「ああ」

と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

【注】

- (1) 水分が少なく、スキーなどに快適な雪質のこと。
- (2) 日本特産で日本を代表するユリである。地域によっては、ヤマユリと呼ぶこともあり、最近ではその数も減ってきていると言われている。
- (3) 山林や丘陵地などに自生するユリ科ナルコユリ属の多年草で、北海道から九州、中国や朝鮮半島に自生している。白い花が列をなしている容姿が、鳥を追い払う鳴子に似ていたため、ナルコユリと呼ばれるようになったとされている。
- (4) 雪の上などを歩くとき、深く踏み込んだり滑ったりしないように、靴などの下につけるものこと。

【参考文献】

- 中国新聞（平成20年）「恐羅漢7人不明」など関連記事
戸河内町（平成9年）「戸河内町史」